

岡崎久彦著「陸奥宗光(上)」PHP文庫 1990年11月15日刊を読む

外国から学ぶ謙虚さを考える

1. ただ、読んでみて、それが陸奥の動機の全部といえないとしても、少なくとも一つの動機となっていると私が確信できるものはある。それは、日本人の民度をいかに向上させるかという、明治人共通の問題意識である。

(1) 19世紀の人々の考え方の中には、日本だけでなく、むしろ文明の中心であった欧米の人々の間に、「文明」を物差しとする厳然たるハイアラキー(上下の秩序)があった。

(2) 野蛮国が植民地化されて、その人民が奴隷のように扱われるのは当然とされ、日本のように文明と野蛮の中間の国が不平等条約を押しつけられるのも当然と考えられた。

(3) デモクラシーの実施も民度次第と考えられ、日本人の民度は、デモクラシーを運営するのに必要な程度の高さに達しているかどうか、議会制度導入の是非をめぐる一つの大きな争点となっていた。

(4) 陸奥がのちに外務大臣としてその改正に心血を注ぐ不平等条約については、陸奥も、『福堂独語』の智識の部分で、すでに強い問題意識を表明している。

2. 過去二十年間、政治面経済面における欧米諸国との交渉において、日本は常に欧米の侮慢を受けている。独立国としての体面を維持していないといつてよいくらいである。心ある人は少しでも早くこの屈辱を除こうとしているが、まだ誰もできない。この点については、嘉永、安政ごろの日本人と、現在明治の日本人との間にいかなる差異があるのか。しかも、維新以来十三年間は、わが国が前代未聞の発達を遂げたと自慢している時期ではないか。……嗚呼、わが国三千万の人民は、その智勇の程度はまだ二十年前の日本人に勝っていないのである。したがって、外国人がわれわれに加えている侮慢は少しも軽減していないのだ。われわれはまさに新に臥し胆を嘗め、つとめて智識を発達し、勇気を振興して、会稽の恥を雪がねばならない

3. (1) つまり、諸外国の侮りを受けないようにするためには、智識、すなわち文明の程度と、勇気、すなわち進取の氣象を振興しなければならないという論である。そして、智を増進させるには、今まで日本人の智識の発達を阻害していた封建的専制政治を脱して、自由な環境を作る必要があると述べている。

(2) 勇気についても、維新前後で役に立ったのは、封建時代に武士として勇気を涵養^{かんよう}してきた人々であるが、そういう世代はやがてなくなってしまうので、一般人民の封建時代以来の卑屈柔弱の弊を改めて、不羈^{ふき}独立の気象を増進しなければならない、と言っている。

(3) 日本の国権回復と日本人の民度の向上が、不可分に結びつけられていた明治人の発想である。

4 . もっとも、この考え方は、明治に限らず、戦後の日本でも 1960 年代までは広く存在していた。日本人はこれだからいけない。そこを改良しなければならないというような発言は、日常でもよく聞かれたものである。そんなことを覚えている人もだんだんいなくなるであろうが、1960 年代の後半、日本経済の高度成長の中で、日本人が急に、外国から学ぼうという謙虚さを失っていくのに、危機感さえ感じたこともあった。

P377 ~ 388

[コメント]

「日本人は世界一だ」と考え、全くといってよいほど、世界から学ばないことが多くなりすぎたように感じられてならない。外国から学ぶ謙虚さをもう一度取りもどしたい。

- 2009 年 6 月 29 日林明夫記 -